

南京木屑 (ナンジンムーシエ) 2

大学生と授業

菊 埼 威

菊埼さんは昨年9月から南京の大学で日本語教師をされている。奥さんが帰国され炊事、洗濯をやりながら授業に奮闘中。
(編集部)

中間テスト

10月30日に濱江学院の4年生2クラスの中間テストをした。どちらもそれぞれ最後の課から出題した。どのくらいの成績なのか皆目見当がつかないので簡単な問題にしたのだが、案の定、平均点は75と77点で、全体としてよくできた。漢字の読みや書写はほほよいが、やはり読解や作文、日語訳ができないものがある。最高点は日語97点、国際商務は96点で、最低点は日語33

点、国際商務6点、両クラスとも不合格者(60点未満)が8人いる。早くできたもので40分、長くかかって70分であった。期末は問題量も増やし、中身も少し工夫しよう。問題は不合格者対策だ。

テストにあわせて、今までの授業の感想を求めたが、「授業は楽しい時間だ」「授業が生き生きしている」「何回も読むので発音がよくなる」「繰り返し読むので内容が理解できる」「おもしろい」「やさしい」「親切」「博識」「智者」「ユーモアがある」とお世辞もあるだろうが嬉しい反応だ。中には「かわいい」「活発的の人」などというのもあって、クラスで大笑いした。日本の歴史や文化、流行・風俗・料理・礼儀などを教えて欲しいという要求もある。「何回も読むのは時間の

無駄だ」というのも多くあり、学力差による感想の違いを痛感させられる。

授業を振り返って

前学期の前半が終わったところで、今までの授業を少しまとめてみよう。

濱江学院4年生の授業は「高級日語3」の教科書を用い、日本の高校現代文レベルの随筆や論説文を節読・斉読・指名読みという具合に音読を繰り返しつつ、語句の解釈や内容読解や付随の練習問題をし、時折重要語句に関する単作文を課している。前半で3課を終了した。1課につき2週8時限を目標にしているが、このペースを遅いとする学生と早いと感じる学生の両極があり、悩みの種である。彼らは、私の板書や解説に応じて電子辞書を引きながら学習を進めていく。こちらから辞書を引き引き、中国語を交えて解説する。「わかりますか」と言うと大方はウンウンとうなずいたり、はいと言ったり、わかりますと言ったりするのでそのまま続けるが、聞いてみると実はよく分かっていないと言つこともある。教室の前のほうに座っている学生は予習をよくやってきて成績もよく、しっかり顔を上

げて話を聞いてもおり、質問への反応も私に対する応対もいい。顔を見る限り、6〜7割はだいたい分かっているようだが、その他はどうもあやしい。不可解な顔をしていたり、つまらなそうな顔をしている者もいる。さっぱり学習意欲を示さないものもいる。最初の頃は新聞を広げたり、机の下でゲームをしたり、隣とおしゃべりをしたり、教科書を持ってこない者もいたが、一度注意をし、その後何度か声がけをしたら、さすがにそれはなくなつた。ともかく、学生の語学力はまちまちで教科書を滑らかに読む者もいれば、漢字はほとんど読めないという学生もいて、語彙の多寡や聞き取り、作文力などに大きな開きがある。

両クラスとも留学したものが何人かいるので、現在61人と59人のクラスだが、全員の名前をなかなか覚えられず、目配りもよくできない。言葉の壁もあり板書することが多いので、勢い教室の前にいる学生たちとの会話が多くなつてしまふのが最大の問題だ。

2年生の作文の授業は、その点、実にやりやすい。29人と31人という少人数で教室も小さくアットホームな感じで、何よりも名前と顔が一致することがいい。

みんなの反応をうかがいながら授業を進めることができる。おまけに教師用の椅子まである。椅子に座ってパソコンを操作しながら作文添削をすることもある。

今までの作文授業は教科書に従って原稿用紙の使い方や常体・敬体・記号などの文章作成の基本について説明し、練習問題などをやってきた。少人数だから丁寧な問答もでき、机間巡視しながら指導もできる。ときおり短作文も課してきた。作文能力を高めるには簡潔なよい文章に触れることであり、言語能力もそれによって高まる。そこで先月末から名文に親しもうと、井伏鱒二の『山椒魚』と梅棹忠夫の『モゴール族探検記』と川端康成の『雪国』の冒頭、それに吉井勇の『ゴンドラの唄』とを書きさせてきた。彼らが書きしやすく、また理解しやすい名文が多々あると思うが、そのつもりで準備してこなかったもので、家族に問い合わせ、メールで送ってもらったものもある。

毎回百字作文を課すことにもした。日本語で日記を書くことも勧めた。いずれにしろ、学生とのコミュニケーションも今のところほほううまくいき、授業もやりがいはあるが、1週間に1回しかないのがまことに残念である。



濱江学院 学生の授業風景 撮影：菊崎

彼らの作文は、4年生も含めて大方は正しく書いてあるが、今までに、共通するいくつかの間違いに気がついた。それは例えば、格助詞の「を」「が」「に」や係助詞の「は」が混同して使われることや「くなければならぬ」「くべきだ」「くはずだ」（もちろんその否定形も）の混用や「くに対して」「くにとつて」「くについて」などの使い方の誤りだ。その他、妙なひらがなや拗音・促音・撥音の問題などもある。会話においてはさらにアクセントの問題もある。中国語には助詞や助動詞などの付属語の概念がなく、日本語とは言語構造が基本的に異なるだけに、その日本語を学ぶ彼らにとつてはなかなか厄介な問題なのだろう。

作文から見た学生

学生たちは向学心に富み、寮での日々の学習も平均

4時間前後で、10時間以上学習する者もいる。教室での学習態度も真剣で授業のし甲斐がある。教師に対しても常に敬意を払い、実に親切だ。彼らと日々接していて強く感じることは、家族や故郷への思いが実に深いということである。2年生に国慶節連休で帰省した時のことを作文に課したことがあったが、ほぼ全員が家族と一緒にいることの喜びを紙面一杯に書いてきた。大学を卒業したら故郷に帰って親孝行をすると語る学生もいる。一人子なので親子の結びつきが強いのだろうか。

次の二つの作文はとりわけ気に入った。

「晩御飯の後で、母と一緒にテレビを見ながら、学校の面白いことを教えました。母は特に楽しそうでした。」

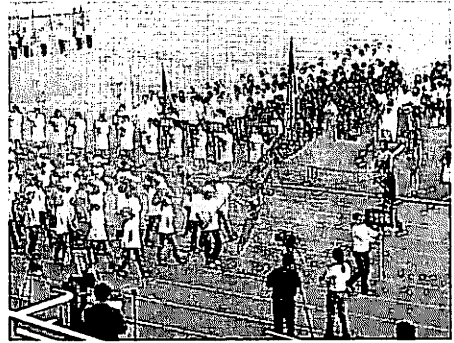
その時、母の幸せそうな目を見て、私は突然に感動しました。私にとって、家族はすべてです。仕事のために留守の父も、ずっとふるさとにいて家を守っている母も、二人とも私の最も重要な親人です。私が仕事や勉強で疲れたとき、家に帰ったら、母の作った料理を食べたり、父と生活の悩みを話したりすると、疲労が全部で解消します。疲れるにせよ、失意するにせよ、

家族のそばにいれば、私は世界中で一番幸せだと思っています。」（顧情）

「朝食の後、祖父と一緒に野原へ散歩に行きました。家を出て故郷の細道を辿ってすぐ野原に着きました。着いたところでごく美しい景色が目に入りました。こんなにきれいな野原を見るのは初めてなので、私は思わずに大声で「秋の野原が好きだ」と言いました。秋の野原は広くて海のように、黄色くて金のようにです。金のような黄色いのは水稻です。私と祖父は青空の下で静かに散歩しながら、そのきれいな野原を見ていました。その時、秋の太陽は暖かく射していました。」

田舎の細道を辿って、そろそろ時間が経ちました。帰る前に私たちは互いに見て笑い出した。祖父の笑顔がとても深く印象に残りました。秋は農民の一番幸せな時でしょう。秋の野原は農民の母国にあげた、一番特別なプレゼントだと思います。」（熊麗娟）

ところで、私が勤務する大学は南京信息工程大学といい、南京大学気象学院を前身とする理工系大学で、数年前に文系学部が併設され、12学部2万余名の学生



正面席に学長ら幹部教員が並んだところで
運動会（陸上記録会）の行進が始まる
11月6日から3日間（濱江学院）

撮影：菊崎

を擁するマンモス総合大学である。

キャンパス面積は約140ha、自転車でぐるりと
回ると小一時間かかり、そこにプラタナスの大木や
ヒマラヤスギ（？）や百日紅など多くの木々が植えら
れ、潤いを与えている。南京の市街地から北へ長江を
渡り、バスで一時間弱の、周囲には田や畑のある郊外
で、それがいささか不便でもあるが、のどかな空気が
漂っていて、街から帰ってくるどほっとする。学生た
ちの中にもこのどかさを好んでいる者もいる。

（つづく）

民族の誇りを歌った『アイヌ神謡集』

「銀の滴降る降るまわりに」

金の滴降る降るまわりに」

これは十九歳で夭折したアイヌの少女、知里幸恵
の『アイヌ神謡集』（岩波文庫）の冒頭に掲げられ
た神謡（カムイユーカー）の一節である。彼女は文
字をもたないアイヌに口承されたユーカーを、ロー
マ字で記録して、それを日本語に翻訳したものであ
る。登別のアイヌ・コタンにうまれた彼女は、祖母
の語る昔話（ウエベケレ）を聞いて育った。長じて
金田一京助にその才能を見出され、同氏宅に身を寄
せてこの民族の叙事詩の整理にとりかかった。記録
の整理が終わった直後の1922年（大正十一）9
月19日に十九才でその短い生涯を終えた。
金田一は「氓滅」しかかった「幾百千万の同族を
はぐくんだこの言葉と伝説とを」「一管の筆に危く
伝え残して種族の存在を永遠に記念しよう」と決心し
た乙女心こそ美しくもけなげなもの」と追悼の言葉
を送っている。いま登別で知里幸恵の記念館の建設
がすすんでいるという。

（大滝）